

瀬名 B 洞穴 (仮名) 洞内説明 角野 二郎

瀬名部落は沖永良部島北海岸、明媚な風光を備えた半崎海岸の丘陵地帯を南へ2km程果敢たる所に位置する、極くささやかで平和な集落である。

部落より海岸へ向かう田圃道のとばには、小さな窪地がいくつか有り、大いていサトウキビが栽培され、今や刈入れの真最中である。これらの窪地の一つ(概念図参照)の北端に、瀬名B洞(仮名)が暗い洞口を開け、我々の侵入を待たせている。洞口は直径1m位で、垂直に4m程落ち込んでいるので、ワイヤ梯子で下降する。降上、大地点は直径6m程のホールで、これより北北西へ幅1~2m、高さ1~1.5mの狭い横穴が続く。鍾乳石の発達は悉く、見るべきものは少ない。50m程で、今度は西北西に90°向きを変え、幅0.5~1m、高さ1~2mで、あいかわらず何の変替もない。狭い洞窟の形にいろいろ身体を合わせながら約80m進むと、他の生残る小さな窪地に飛出す。出口より北東10mの地点に、また洞口が開いていすが、多分者は続いていたものが、侵蝕作用や地殻の変動などで落盤したのであらう。ここより約180mは大体北の方角へ進む。洞内は高さ2~4m、幅2~3m位で、大したホールもないが、鍾乳石の発達は良好で、特に壁に出来たフローストーンやカーテンの成長が著しい。又、途中数箇所にはわたり、水深50cm程度のプールが洞内の幅いっぱい浸みこんでいて、徒渉を余儀なくされる場所もいくつか有る。洞床は石灰岩とは別の堆積岩もしくはフローストーンで被われている。

蛇ヤブの洞より約180mの地点で、方向は北から北東に変わる。この曲り角付近より西へ狭い支洞が約50m続き、最奥部は幅0.3m、高さ0.5m位で、まぶさが見えるが、どこまで進んでも腰骨が伸びないのには全くうんざりさせられる。さて、曲り角より60m程進むと、直径10m、高さ7m位のホールに出る。ホールはおびただしい落盤で埋まり、天井はいつにも崩れそうなので早々に通過する。これより洞内は方向を北東から徐々に北北東に変え、先程の曲り角から約50mの地点で洞窟は十字路となっている。この十字路の手前100m程の間は、つらう石・石筋、カーテンなどが入組み、大変美しい。

十字路を右に行くと、狭い横穴が約50m続き、つきあたりは直径8m位のホールになる。このホールには純白の長い(5~6m)つらう石が何本も垂れており、壁のフローストーンも純白に近い。腰を下ろして一服やすみには絶好のサロンである。十字路の左(北)は幅1~2m、高さ0.5m位の低い横穴を、つらう石に頭をぶつけながら30mばかり匍匐する。途中、獣骨を発見したが、さてこの馬の骨やう……。この匍匐帯を抜けると、急に洞内が開け、高さ10m、幅10mの大きなホールに出る。ホールの東側は大きく崩壊し、海岸近くの畑のとばに洞口を開けている。十字路に戻り、本洞を東北東へ10m程進むと、突然頭の上からまぶしい光が差込む。見上げると、高さ20m、直径1.5m位の煙突状の竪穴が地上へ抜け出ている。登って登れない事はないが、上へ行くに従って幅が広くなるので、なめてかかるとかどい目に会う。この竪穴は地上に出ると、先程の畑の側の洞口とは月と鼻の先の灌木帯に出る。

煙突の地点より東北東へ40m程で、今度はとてつもなく深いプールに出る。プールは直径約10m、水深17mで、トラバースする場所もないし、勿論徒渉するには深過ぎる。考えあぐねたあげく、エアマット6個で筏を組み、先ず1人がザイルの確保付きで対岸に渡り、あとはフックしたザイルにつかまりながら1人ずつ渡った。エアマットの筏は非常に不安定で、下手をするとたちまちひっくり返り、無様な立泳ぎでも被覆しようものなら、観衆からはやんややんやの喝采を受け、以後、瀾嵐で行動せねばならない。

このプールを過ぎると、水深0.5~1mのプールが各個所程有るが、壁をトラバースしたり、浅い部分を避んで徒渉したりして通過する。この辺りの岩盤は波の様に鋭く侵蝕されており、身袋が無ければトラバースの際、痛くて怪我もし易い。

先程の筏のプールより約50mで直角は東から北へ90°転換する。曲り鼻の右側に幅4m、高さ3m位の支洞があり、流水が本洞に向かっている。支洞は東へ20m進み、これより南へ約80m進むと、プールで行止りとなる。全縦に天井が高く、高さ20mの個所も有る。鍾乳石の発達が悪い。本洞に戻ると、この支洞の分岐点附近は1~1.5mのつらら石が発達している。

分岐点より北へ約30mで直角は西に変わり、幅2m程のプールの如い横穴が続く。この当りから又、鍾乳石の発達が見られるが、大して見覚えのするものでもない。80mばかり西へ進むと、水深0.5m、洞内の幅4mいっぱいには水をたたえたプールに突如たる。天井の高さは1.5m位で、つらら石が非常に発達し、水面に届いているものも多い。腰をかかめ、つらら石の間を縫う様にザブザブと約80m進むと、洞内は又つに分かれている。左は同様なプールが15m程続き、陸へ上がった途端、直径15m、高さ10mの大きなホールに出る。ホールの角半分は水深0.5mのプールで占められ、南西側にフローストの発達した高さ5mの滝が落ち込んでいる。滝を直登すると、又広いホールに出るが、天井の高さは15m位である。このホールより先へ行くには水深0.5m、天井の高さ0.5mのプールを10mばかりくぐり抜けねければならない。洞内は北東へU字型にカーブし、最東部迄の50mは泥土が厚く積り、獣骨が発見された。又、鍾乳管の成長が良好で、長いのは1m位もある。

さて、分岐点に戻り、今度は右(北西)へ行くと、洞内は幅10m、高さ5mと広くなり、落盤の岩がゴロゴロ転がっている。前方にうっすらと光が見え始め、ドドーン、ドドーンと物凄い波の音が洞内を揺らし始める。右(北北東)へ曲がった所で、ぽつと洞口が開け、北海岸の灰色のうねりが目の前に迫り、怒濤が黒い荒磯にぶち当たっては簾珠と化するのを目の当りに見る事が出来る。洞口は高さ18m、幅10m位の卵を並べた様な形で、海岸の高さ約70mの絶壁の中腹に突出している。崖の上の広漠たるカルスト台地をここから望む事は出来ないが、羊崎の黒い懸崖と、押し迫り、迫り上がるクリームソーダの白い泡との青々しいコントラストが、いつまでも飽くことなく、クーパーの心を慰めてくれる。

